

〈緊急報告〉

## エリモ岬の危機

自然を無視した「風の館」の建設

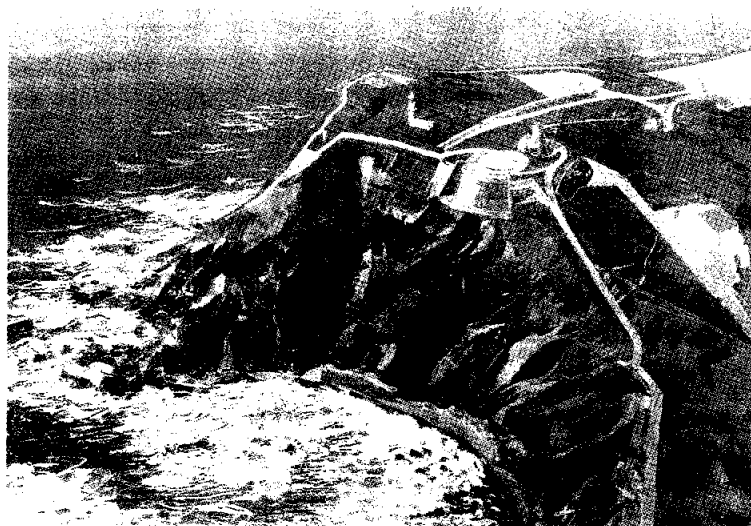
北海道の代表的な自然風景地のひとつである「えりも岬」は「強風」地帯として有名です。

いま、そのえりも岬の先端に、断崖絶壁の岩盤を削った「風の館」という「展望施設兼科学館」が、えりも町によって建設されようとしています。自然公園のなかに、その地域の自然の特性を理解させる「科学館」ビクターセンター」ができること自体は、いいことだと考えます。

しかし、えりも岬の「先端」にこれがなければならぬ理由はありません。「風の館」は本体千三百平方メートル、導入部五百平方メートルにも及ぶ大規模なものが、地下に建設されるもので、ガラス張りの展望室の前面は太平洋に向かう絶壁に「むき出し」となります。これにより、えりも岬の「特異な地形」は大きく傷つけられてしまいます。

(図参照)

「風の館」の構想があることは、私たちも一九九五年夏ごろから耳にしていました。しかし当時はまだ計画として成熟していないものと理解していました。ところが国（農林水産省）の補助金の関係から、話が急に本決まりとなって事態が急展開した、と伝えられています。



「風の館」完成予想図

今年の一月に入って、北海道知事が国定公園の「公園事業」として「風の館」を承認する方向、との情報が入ったので、北海道自然保護協会では理事会で慎重に検討した結果、二月九日に「日高山脈襟裳国定公園内『風の館』計画を慎重に取扱うことへの要望書」を知事あてに提出しました。

(25ページに続く)

(21ページから続く)

しかし、北海道の「承認の方向」は変わる気配がありませんでしたので、この問題については「道民の疑問にも答えながら、さらに論議を深める必要がある」として、二月二一日に知事あて、さらに「質問状」を提出しました。それに対して二月二八日づけで北海道保健環境部環境室長から「回答」が寄せられました。

質問と回答は各七項目ありますが、そのうち四項目をご紹介します。回答の後のカッコ書きは、北海道の回答に対する筆者のコメントです。

### 一 えりも岬の特異な地形を

どう認識しているか

〈質問〉えりも岬は日高山脈の南端が海中に没する部分である。これは、その特異な造山運動で知られる日高山脈の山頂部や中腹部と同様に、永い地球の歴史のなかで形成された貴重な地形である。またえりも岬は、宗谷岬、知床岬、ノサップ岬などと並んで「さいはて」のイメージ

ジに結びつく、北海道の魅力の根源の一つとなっている。この特異な地形は人為的に損なわれることなく、百年〜千年の後世まで残さなければならぬものであるが、知事としての地形保全に対する見解をお示しいただきたい。

〈回答〉国定公園に指定されている襟裳岬の、海蝕崖、岩礁地帯を主体とした優れた海岸景観を構成している地形については、将来にわたり大切にしていけることは必要なことであると考えております。

(ここには大きな見解の相違がありません。ただし「将来にわたり大切にしていける」の内容は、次の二で差異が明らかになります。)

### 二 貴重な地形を傷つける行為は

「持続可能な開発」に反しないか

〈質問〉「風の館」は導入部を併せた床面積一、三七六㎡(延べ一、七六六㎡)の大規模なもので、えりも岬の先端の地下部を掘削する計画である。

しかし将来、「風の館」の建造物の耐用年限を経過した後、これを自然地形へ原状回復することは事実上不可能である。特異で貴重な地形を復旧不可能な方法で開発することは、地球環境保全のキーワードである「持続可能な開発」に反する行為であり、自然公園施設としての適性を欠いているが、知事としての見解をお示しいただきたい。

〈回答〉「風の館」の建設予定地は堆積した土砂が主体となっておりますが、この地域は明治時代には灯台が、戦前には軍の施設が昭和二五〜四五年頃まで売店が建設されていたなど、現在まで

様々な人為的な改変が行われてきた場所であります。「風の館」の計画にあたっては、建設予定地の地質・地形等について配慮し計画されていると考えております。

(質問は「地下部」の岩盤を掘削すること、すなわち「地形の保全」を問題としているのに、回答は「地上部」の「堆積した土砂」部分の説明を主体とし、問題の本質をはぐらかしています。「様々な人為的な改変が行われた」というのは、地上部に建物が建っていたことがある、というだけで「地形的な改変」はほとんど行われていません。つまり過去の建物は「持続可能な開発」の範囲内だったのです。

最後に「地形・地質等について配慮されている」としていますが、岬の先端を永久に傷つけることが、なぜ「配慮」なのか、その理由はまったく説明されていません。皆さん、これで納得できますか？

これが「配慮」だとすると、一の回答の「将来にわたり大切にしていける」という内容に、大きな認識の差異があることになりました。(51ページへ続く)

### 追記

北海道は、この回答の直後に「風の館」の承認処分を行ってしまいました。回答に対する反論や、自然保護世論の広がりをおそれたためと思われる。

台がなければならぬ必然性はまったくないが、知事としての見解をお示しいただきたい。

〔回答〕自然公園の利用形態については、利用者個々人の考え方により様々なものがあると考えております。このようなことから、各種公園利用施設につきましても出来るだけ多くの人の利用が可能となるよう配慮し整備がすすめられてきており、「風の館」についても強風・海霧といったこの岬特有の自然条件を考慮して、多くの人が利用できるよう計画されたものと考えております。

（この回答のように、「利用者個々人の考え方に様々なものがある」から「出来るだけ多くの人の利用が可能となるよう配慮」することを優先させれば、さいはての岬だけでなく、高山の山頂でも、湿原の中でも、どこでも道路や施設を導入することに連なってしまう。）

#### 四 「風の館」が岬の先端に

なければならぬ理由は何か

〔質問〕「風の館」の事業効果は、えりも町の資料（地域振興主要事業紹介・襟裳岬ビジターセンター「風の館」整備事業）によれば、①地域イノベーションの核となる、②継続的に発展していく可能性をもつ、③町の誇りとなり、町のアイデンティティの象徴となる、④住民の「風」に対する意識を誇りに変える、⑤交流人口が増大される、⑥就業機会の創出が図られる、⑦「風」を介した地域ネットワークが形成される、の七点が挙げられている。これらの効果をもたらすために、「風の館」がえりも岬の「先端」になければならぬ理由は

一つもないが、知事としての見解をお示しいただきたい。

〔回答〕襟裳岬の魅力は岬の突端及びその先の岩礁地帯の景観にあります。また、「風の館」は既存施設が老朽化したことにもない、この建替えにあわせ各種事業効果を考慮し、計画されているものと考えております。

（「既存展示施設が老朽化したことにもない、この建替えにあわせ」というなら、同じ程度の規模構造のものへ「自然がじかに体験できる」もので、ガラス張りではありません）を再建すればよいのです。現在の展望台が「狭い」という苦情は聞いたことがありません。質問は「風の館」の博物館的な部分が、岬の先端になければならぬ理由を聞いているのですが、「各種事業効果を考慮」と漠然と答えるだけで、なるほど岬の先端に博物館的なものが必要だ、という説得力はまったくありません。

私たちは、最初に書いたように、「風の館」の博物館的な役割は必要だと考えています。しかし岬の先端にできることに疑問をもっているのです。博物館的な施設は、えりも岬の先端から一歩さがった、「地域」内の適当な場所を選定すべきだと訴えましたが、行政は「聞く耳」をもっていないのです。北海道の自然保護行政は、「特異な地形の保全」より「各種の事業効果」を「大切」にしています。このような環境行政が行われることを、皆さんはどうお考えでしょうか。（Q）

（25ページから続く）

#### 三 岬の先端で自然体験になじまない

展望をさせる必然性はあるか

〔質問〕「風の館」は「天気の良い日でも安心して岬に行ける」のがセールスポイントだという。しかし天気の良い日は展望がきかないのが通例であり、これは意味がない。しかもガラス張りの温室のような「無風」環境で「強風」地帯を展望するのは、自然公園の自然体験の本質に反するもので、岬の先端にガラス張りの展望